

諸君! 平成21年2月号より
(文藝春秋発行)

日本近代

陸奥宗光『蹇蹇録』

他策なかりしを信ぜんと欲す



わたなべ としお
渡辺利夫
(拓殖大学学長)

陸奥宗光『蹇蹇録』の最終章に強い筆
圧で刻まれた言葉である。

東学党の乱に始まり、三国干渉により
遼東半島還付という苦汁を飲まされるま

での日清戦争外交の全過程を、この戦争の全局を指導した時の外務大臣自身が執筆した著作が同書である。国家の存亡を賭した外交過程を凍たる漢語調で記した、政治家の著作としては稀代の名品である。

進むべしと判断した時には全力をもつて相手に挑み、志ならず後退を余儀なくされた時には潔く身を引いて、次の好機に向け万全の態勢を整える。「畢竟我にありてはその進むを得べき地に進みその止まらざるを得ざる所に止まりたるものなり。余は当時何人を以てこの局に当らしむるもまた決して他策なかりしを信ぜんと欲す」

三国干渉を受けこれを屈辱としてみずから卑下するのではなく、悲嘆にくれるのでもなく、彼我の国力と軍事力の差を怜悯にみつめ、この差を埋めるために全力で自国を立て直すより他に道はない。三国干渉について論じた同書の一九章、二〇章、二一章のどこを読んでも、陸奥が弱音を吐いたところなどまったくな

い。帝国主義時代のパワーポリティクス
の現状をひたすら現状に即して淡々と記すのみである。極東アジア国際関係の深淵を描きながら、読む者に響くのはむしろ陸奥の気概と豪気である。

凡俗なる私がこの言葉を「座右の銘」とするのは何やら気恥ずかしいが、個人の人生であれ組織の運営であれ、事態の收拾に窮し万策尽きて果てなるとするよ
うなことが必ずや何度かある。そのよ
うな時に思い起こしたいのは、陸奥の人生の苛烈であり、追いつめられてなお静謐なる彼の心境である。

幼少期には父が巻き込まれた政争により一家離散の憂き目に遭い、西南戦争では土佐藩に与し官軍に挑んで敗北。国事犯として禁獄に処せられるという苦い過去をもつ陸奥は、悲嘆の人情を誰よりも深く知っていた。にもかかわらず陸奥の書いた文章にはどこにも陰りというものが
ない。『蹇蹇録』は三国干渉を余儀なくされた外務大臣の弁解の書だと記したある歴史学者の文献を私は記憶している

が、陸奥の文章から立ち上る香気を嗅ぎ取ることでできないただの凡庸なのであろう。

万策尽きるほどの努力を重ね苦悩する指導者が、現在どれほどいるのだろうか
と訝る。およそ国家が国家と呼ばれる最低限の条件は、国民の生命と財産の守護である。北朝鮮による拉致被害者は数百人に達する可能性がある。六カ国協議というあてにならない討議の場に出席しているだけで指導者の責めを負うたことになるのか。

北方四島、尖閣諸島、竹島などに対する周辺諸国の挑発的外交に、及び腰で抗議のステートメントを発するだけではないのか。集団的自衛権解釈の旧套を一步でも踏み出す気概がない。周辺諸国がナシヨナリズムをたぎらせ日本に向けて矢を放っているのに、当の日本の指導者の方は「ポストモダン」の涼しい顔である。陸奥は末期の肺結核で血痰を吐きながら『蹇蹇録』の執筆に精魂をこめ、書き上げてほどなく蒼天に消えていった。